

人類共栄会創設五十周年記念シンポジウム 基調講演

今、NGOに何が求められているのか

①

AMD A 理事長

菅波 茂

一月十三日、信修館において、人類共栄会の平成十四年度総会と創設五十周年記念シンポジウムが開催され、日本有数のNGOとして、国際的にもめざましい活動を展開しているAMD A (アジア医師連絡協議会)の菅波茂理事長が記念講演を行った。本誌では、同講演ならびにシンポジウムの内容を数回に分けて掲載する。



菅波 茂 先生

◆AMD Aのおかげで夫婦仲が良くなった

すみません。医者、の職業病で、いつも手に何かを持っていないと落ち着かないもので、マイクを持って話

させていただきます。私たちはAMD Aという団体なんですけれども、頭の良い人が、「ア・ムダ」と、間に点を入れてくれまして、無駄なことをしているから「アムダ」だ……。

「人の金使つてまで無駄してはいけません」と、よく言われます。けれども、私自身こういった国際協力に携わって三十年になります。けつして無駄でなかったと思っています。まず、妻との仲が良くなりました。こういう活動をやっておきますと、夫婦仲が本当にうまく行きます。それで、女房ばかりか、親の姿を見て、子供がまっとうに育ってくれたということが、最大の効果だろうと思っております。

こういう活動をやっておつて、なぜ、妻との仲が良くなったかといえますと、非常に簡単なことで、『大学』(註)儒教の経典「四書」のひとつ)にもですね「小人 閑居して、不

善をなす」という言葉がありますが、私、医者をやっておりますから、少しばかり小銭も入ります。なんとなく世間では良いように見られますので、もし暇があったら、たぶん二号さん、三号さんを作つてたんじゃないかなと(会場笑い)……。そして、金もたぶん博打に使つてたんじゃないかなと……。ところがAMD Aをやつてましたので、そういう暇ができずに「多忙にして、不善はなし」ですね。時間がなかつたと……。これが一番、夫婦仲がうまくいっている理由じゃないかと思ひます。

人類共栄会の五十周年ということは、そういった意味でも、たくさんの方が、人類共栄会の支援の対象になつたたくさんの方の中の人たちも、その恩恵を蒙つて……。そういった意味で、人類共栄会の働きというものは本当に素晴らしいものだと思いますし、五十年前からそういったことをやられていたこと自体がすごい話だと思います。

◆宗教団体に対するメディアの偏見

ところで、キリスト教関係の方が海外協力活動をやっていることはよくメディアに採り上げられるんですけども、日本ではなぜかメディアの偏見がございまして、クリスチャン関係の人がそういったことをするのは当たり前だと……。ところが、神道とか仏教系の方が救援活動をやりますと、それ

は、自分とところの教勢を伸ばすための布教宣伝活動に違いはない(だから、採り上げない)という、メディアの側の偏見がありました。

私も本当に、つい最近まで、五十年前からこういう活動をやつておられる素晴らしい団体があるということを知らなかつたですね。それは、なぜかといいますと、メディアが紹介しないからなんです。ところが、同じことを小さなキリスト教の教会がやると、どんどんメディアが紹介するわけですね。そういった意味で、またまた日本には「西洋に起源を持つキリスト教は立派な宗教で、社会活動をするが、神道や仏教にはそのような社会奉仕活動の理念がなく、もしそんなことをする連中がいたら、それは宣伝か布教目的からだ」という差別と偏見があります。

人間は誰でも、「人に対して役に立ちたい」という気持ちを持って「いるんだ」ということを、まずメディア自身が知つていかななくてはいけないだろうと思います。今日はそういった意味で、人類共栄会の皆様方とお会いさしていただいたことを非常に嬉しく思っております。

◆AMD Aの活動は私自身の一部

私たちAMD A (アジア医師連絡協議会)は、正式には一九八四年に設立しましたが、私自身の活動は昭和四十六

(一九七二)年に、最初の医療チームをタイとビルマの国境地帯に派遣したところから始まって、三十年間ずっとやってきているんですけども、はじめは人類共栄会のような大きな目的ではありませんでした。

最初の医療チームを出した時に、私たちは寄付を募って行きました。ところが、寄付をする人は必ず「こう言います」「あんた、まさか今年だけで止めるんじゃないでしょうね」と……。そりゃあそうですね。皆さん大切なお金をくださいるわけですから、私たちが活動の主旨を述べますと、良いことを言いますとですね、必ず「来年もやるんだらうな」と、こういう質問をされます。私たちも当然、「来年もやりますよ」ということで、皆さんが貴重なお金を下さってきた訳ですね。それで、また新しい年が来ますと、去年発行した手形を今年も切らなさいけないと……。こういう形で、これを三十年間ずっと繰り返してきた訳ですね。

実は私、尺八を習っているのですが——これは学生時代からやっているんですけども——ある時、尺八のお師匠さんにこういう質問をしたことがあるんですね。「先生、いつになったら私は尺八が上手くなるんでしょうか？」と……。こういう質問をしましたら——その先生は都山流の竹林七賢の七人のうちの一人という、本当に内弟子で入って上手くなられた方なんですけども——そのお師匠さんが私に言われたのは、



菅波先生の基調講演に熱心に耳を傾ける会員たち

別々(の病院に勤める)の勤務医だったら、本当に深い話をするのがなかったと思うんですけども……。病院経営には倒産ということがありますし、それから、こういったA M D Aという皆さんの貴重な寄付金や税金も使わせてもらってますから、もしスキャンダルがあると「それで終わり」という危機感が常にありました。倒産とスキャンダル、これが私たちにとつて一番の問題なんですけども、そういうことが起こるかという状況が度々あったんですけども、その度に、女房と真剣に話をしてきました。

今、男女共同参画社会と言いますが、困難と直面する毎に、女房の私にない素晴らしい面というものが解ってきて、女房に対して尊敬の念が出てきました。問題解決する時に、自分にはない素晴らしいものを相手に見つけ出した時に尊敬の念が起こってきます。

「菅波君、十年やりなさい。十年やると、上手いとか下手でなくて、もう尺八がないと君、淋しくなるよ」と……。そのときに君の音色が出るんだから。とにかく十年間やりなさい」と、いうことを言われたことがありました。私もこういって活動を三十年やってきまして、もう、人のために役に立つとか立たないとかですね、そういうレベルじゃなくて、A M D Aの活動が自分の生活の一部になってしまっていて、国際医療協力をやらないと、なんとなく自分自身が落ち着かないという、こういう状態になるんですね。

◆困難が尊敬と信頼を創り出す

あんまり理念めいたことを私が言いますと、ちょっと苦しいんですけども、いろんなトラブルがありました。私も病院(の経営)をやっておりますんで、もしA M D Aという団体が潰れば、同じく病院のほうにも被害が出ていく。それから、病院が潰れば、このA M D Aの活動もできなくなるという二股人生をやってしまったもので、いずれにしても、女房も巻き込んでますので、トラブルが起きる度にですね、女房といろんな話をして「どうしたらいいのだろうか?」と、相談しながらやってきました。

それで、私は思っただんですけども、「トラブルは大切な」と……。うちの女房も医者なんですけども、もし、私たちが

それから、どんな困難に陥っても、女房が決して逃げないということが解ってきますと、信頼の念が起こってきます。というところで、この活動を通じまして、私は女房との間に尊敬と信頼という人間関係をみることでできたわけですね。ただし、女房が私に対してそういうものを持つたかどうかは別で、聞いておりません(会場笑い)。皆さんも、聞いてみて下さい。それで、A M D Aの基本的な理念というのは、私がいرونな本を見て感じたことではなくて、女房と私自身の夫婦関係の中ですね、私が気付いたことをA M D Aの人道援助の三原則とか言っ、いろいろやっております。

◆トラブルは財産・知恵の泉

A M D Aは、世界で三十カ国に支部があります。そこで、もの見方、考え方の違った人たちが、どのように一緒に生きていけるか……。そういった意味で人類共栄会と同じ方向を目指しているんですけども、その方法論において、どこが違うのかといいますと、A M D Aは私と女房との関わりの中でいرونなものを創り出してきたところが極めて生臭いんですね、本当にそれが普遍性を持っているのかどうかというのは、私も解りません。(次号へつづく 文責編集部)

〈人類共栄会創設五十周年記念シンポジウム基調講演〉

今、NGOに何が求められているのか

③

AMDA 理事長

菅波 茂

一月十三日、信修館において、人類共栄会の平成十四年度総会と創設五十周年記念シンポジウムが開催され、日本有数のNGOとして、国際的にもめざましい活動を展開しているAMDA(アジア医師連絡協議会)の菅波茂理事長が記念講演を行った。本誌では、同講演ならびにシンポジウムの内容を数回に分けて掲載する。



菅波 茂 先生

では、その基本的な条件とは何かということになりまして、彼が言ったのは、「健康である」こと、「土地改革」の、この三点を国家が保障しないと、「貧しい人は、いかなる民主主義体勢の中でも、自己実現は難しい」と……。しかも、国家が保障しなければいけないから、これは福祉であると……。こういう考え方で、経済開発の中に福

祉の概念を持ち込んだ新しい経済学だということでノーベル経済学賞を貰っているわけですね。

この二人は、どちらもベンガル地方の人なんです。二人が出した結論は「今日の家族の生活、明日の希望」というものに対してどうしたらいいのか。すなわち、「貧しい人は、なぜ貧しいのか」という基本的な問いに対する答えなんですね。こういった貧しさというものに対して、「貧しいのは本人の能力がないからだ」、あるいは「意欲がないから」ではないんだ。「チャンスがないからだ」と……。それから、「本来、貧しい人に対してやってあげなきゃいけない基本的な条

件整備ができていないから、貧しい人は勝負ができないんだ」と……。そういう新しい見方を出してくれている人たちがいるわけです。これが、貧困に対する新しいやり方になってきているし、私たちNGOも、そういった面からいろんなプログラムを立ててやっております。

私たちNGOがやりますのは、「ヒューマン・セキュリティ(人間の安全保障)」といまして、個人個人が人生を全うしていくためにはどうしたらいいかということで、セン教授が言いました、「ものが読める・書ける」すなわち教育プログラムをどうするか。それから、人間、健康でなければ人生はなかなか難しいということ、健康に対するプログラムというのもやっています。

それから、もうひとつは、ユノス教授が言いましたように、貧しい人にはチャンスがないからだ。そのチャンスとは、お金を安い金利で普通に貸してもらえらること。そうすれば、能力のある人には実現できるということで、小規模融資マイクロクレジットということをNGOの観点からやっています。

それから、もうひとつは、子供に対する教育をどうするか。それについては、家庭の中では、母親が大きな役割を占めているので、母親に焦点を当てたプログラムをやっています。母親が意識を改革して、もっと役割を果たせるようになるないと、「今日の家族の生活、明日の家族の希望」というも

のは、難しいということですね。私たちは野垂れ死にさせない、平和を守るといふ意味から、このようなプログラムをやっています。

◆宗教NGOに期待するもの

そこで、私が考えますのは、NGOは何も民間の団体がやるだけじゃなくて、本当に人類共栄会のような宗教NGOというコンセプトが日本にはどんどん出てきてもいいんですけども、なぜか、クリスチャン系のNGOしかメディアで紹介されないという、こういう不平等さがあつたと思うんです。

では、宗教NGOに期待するものは何か？ 私たちAMDAは医療というものを中心にやっております。で、私たちができるのは「人を野垂れ死にさせない」という健康の部分についてはできませんけども、魂の部分についてメッセージを届けるといふことに関しましては、専門家ではありません。むしろ、人類共栄会、すなわち宗教NGOとしての位置付けをもうひとつされるとしたら、魂に対する呼びかけ、つまり、「人権を守る」という、こういったところを、むしろ聖職者の方々がですね、大きな役割を果たされるころではないかと思うのです。

AMDAは、緊急人道援助をやっていますけども、私が最近、非常にへんだなと思っていることがあるんです。私たち

が緊急人道援助に出掛けていく各所には、いまだに太平洋戦争の傷跡が残っているんですね。例えば、一九九五年の五月にサハリンで地震が起きました。私たちは立正佼成会の方々と一緒にサハリンに行きました。その時に、私たちは飛行機をチャーターしてたくさんのお金を送ったんですけども、それがサハリン全土にテレビ放映されました。在留日本人の方々からこういふふうに言われました。「私たち(日系人)は今まで非常に恥ずかしかった」と……。恥ずかしいというの、サハリンでは、敗戦国の日本人は三等市民なんですね。二等市民は朝鮮人の方々、そして一等市民はロシアの方々ですね。ところが、AMDAと立正佼成会が、まっ先に救援機で大量の物資を送り込んだことが地元のテレビで放映されました。三等市民だと言われていた日本人の方々がですね、「これで私たちも胸を張って歩けるんだ」と、こういうことを私たちに言われたんですね。

それで、太平洋戦争というのは、もう六十年前に済んだと思っていたんですが、いまだにそういうことが残っているのかという認識をしたのと、その救援機を送る前に、小型チャーター機で私たちが三人を先に送り込んだ時に、パイロットをされた野口さんという方ですが、この人が非常に喜んで下さったのです。「私は実はゼロ戦のパイロットだったんだ」と……。それで、「太平洋戦争の時は、敵を殺しに行っ

して、非常に気候が乾いていますので、英印軍の戦車の前に非常に酷い目にあわされた……。戦後、そこに日本人の捕虜収容所もできた、そういう所らしいんですけども、岡山県のビルマ会の方が、「菅波さん、あそこはぜひ覚えていて欲しい」ということで、私たちはそこでもプログラムをやっているんです。



菅波先生の基調講演に熱心に耳を傾ける会員たち

そういうことで、私たちは緊急救援であちこちに行くんですけども、太平洋戦争の跡が、いっぱい出てくるわけですね。この前もベトナムに行きましたけども、ベトナムでもたくさんのお日本兵の方が餓死をしているわけですね。そして、戦争中、百万人からのベトナム人も餓死している……。そういう事実を向こうの人に話しますと、向こうの人は、

ただけども、今回のように人を助けるためにAMDAの皆さんを運ぶということが、私は非常に嬉しいんだ」と、こういうようなことを言われたんですね。

◆魂の世界へ導かれつつあるAMDA

それから、一九九八年にバプア・ニューギニアのアイホテというところで現地の人たちが一千人も死ぬという大津波が起きましたんですけど、この時も私たちは救援チームを送りましたら、名古屋の遺族会の方から電話が入ってきて、こう言われました。「覚えていて欲しいんですけども、ガダルカナルでは、半数以上の人が生き残っているから、ガダルカナルの話(註)幾万人もの日本兵が餓死したことというのは後世に伝わると思うんですけども、(バプアニューギニアの)アイホテでは、実は九万人の日本兵が敗走したんだけど、ところが生き残ったのは一万五千人しかいないんだ」と……。で、「だんだんその人たちもいなくなるから、あのアイホテでたくさんのお日本兵が死んだという事実が忘れ去られることが自分は恐いんだ」と。「だから、ぜひ、このことをAMDAとして覚えていて欲しい」と……。

それから、私たちがミャンマー(ビルマ)に行きますと、メチーラというところがあるんですけども、そこで、英印軍と激戦になった「インパール作戦」から逃げる日本兵がおりまして、

そういうことを覚えていることを喜ばれるんです。多くの日本の兵士の方も餓死しているという、そういう場所も判ったんですけども、やればやるほど、「私は、なぜ日本国内では、もう過去のこととして誰も相手にしない、太平洋戦争の傷跡がまだ残っている、そういう現場に突き合わされるのかな？」という疑問を私自身持つてきました。私は魂の世界というのは知らないんですけども、誰かがAMDAをそちらへ連れて行っているのかなと、そういう疑問を最近持つようになりまして。

(次号へつづく 文責編集部)

五月二十六日(日)午前十時〜午後三時

チャリティー・バザー開催

友愛セールや模擬店など多彩な

催物が用意されています

主催 金光教泉尾教会信徒会

協力 ボーイスカウト大阪第八団

ガールスカウト大阪第七団

と悪いことがあります。例えば、「あの世がどうなっているのか？」ということや医者が言っただけはいいじゃないですかね。もし、われわれA.M.D.A.がそういった発言をしますとおかしなことになってしまいますから。そういったお話は逆に、泉尾教会の皆様からご指導を賜れたらと思います。

まず、最初にこの話をしなければなりません。つい先日、フィリピンのレイテ島で大規模な地滑り(註:二月十七日、フィリピン中部のレイテ島南部のレイテ州サン・ベルナルドで発生)が起こり、大勢の方々が亡くなりました。私たちA.M.D.A.のチームの者が、今も現地で活動しています。実は、今回の活動は金光教の国際平和活動センターに助けていただいています。実際現地に派遣して驚いたのですが、今現在、現地で活動を行っている日本の団体は、われわれA.M.D.A.と金光教国際平和活動センターの二団体だけなんです。

地滑りが起こったのは日本時間で二月十七日午前十一時頃ですが、私がこの災害のニュースをA.M.D.A.本部のスタッフから受け取ったのは午後三時でした。私が得た情報は、ある新聞の「死者が十八名、行方不明者が千名」という発表だけでしたが、通常、発展途上国の災害においては、最初に行方不明者数が多く発表され、次第にその数が減少していく傾向があります。ですから、メディア一紙の「行方不明者が千名」との発表だけの時点で、果たしてチームを出すべきかどうか

を二名派遣しますから、A.M.D.A.のチームの受け入れをお手伝いできます」との有り難い返事をいただきました。そうしてわれわれのチームが現地に向かったのです。

今回は金光教の国際平和活動センターの方にお世話になっておりますが、先ほど三宅光雄先生とお話しした中で、泉尾教会様も世界中にネットワークを作っておられると伺いました。それを聞いて、私は「是非、これからもA.M.D.A.も一緒に活動させていただけたら」とお願いさせていただきました。

た。時には、皆様にご迷惑がかかることもあるかと思いますが、よろしくお願ひしたいと思います。

▼言葉によって
気持ちを手
に伝える

今回、フィリピン
行きの航空チケット
を買った際に、私は
女性の力を改めて

菅波先生の熱弁に耳を傾ける求道会員たち



大いに迷いました。その時、何故か私はこの「行方不明者千名」の文字が「死者千名」に見えて、「全部で二、〇一八名の死者ならば、すでに犠牲者一千人を超える大災害になっているから、絶対現地に行かなければならない」と、至急チームを派遣しました。私たちのスローガンは「救える命があればどこへでも」ですが、実際には私たちだけではどうにもならず、今日のような様々なご縁を頂いた上で初めて、活動ができるのです。

今回、私たちはチームを出すにあたって、まず、私は、元フィリピン医師会会長をされていた、七十歳になる中国系フィリピン人のプリミティブ・チュア(Dr. Primitivo Chua)先生に電話をかけお願いしたところ、先生から「A.M.D.A.の受け入れに協力しましょう」との返事をいただきました。そして今度は、チュア先生から直接、南レイテ医師会の会長であるマトウ先生(Dr. Matou)に「A.M.D.A.を正式に受け入れて欲しい」と連絡を入れていただき、了承を得たことで、A.M.D.A.の受け入れが正式に決まりました。次に私は、金光教の国際平和活動センター事務局長の西村美智雄さんという方——三宅光雄先生とは金光教学院の同期で、共に学ばれたと聞きましたが——に電話をしました。「私たちは、フィリピンのことはよく分からないので、是非協力をお願いしたい」と伝えたいところ、直ぐにマニラへ連絡を取って下さり、「至急、職員

感じました。出発当日の予約、購入は通常ディスプレイカウンターが効かないんですね。今回はA.M.D.A.本部の女性を現地に派遣したのですが、彼女がフィリピンに入ってから報告によると、なんと当日、関空の発券カウンターで交渉したらいいです。これは前例がありません。もちろん、応じてくれたタイ航空の現場の人たちの臨機応変な判断も立派だと思えますが、気の弱い男性に「同じことをやれ」と言っても無理ですよ(会場笑い)。よく女性同士が喧嘩した時に、「あの子は気が強いから」と言われますが、その時に私が「じゃあ、気の弱い女の子を僕に紹介してくれ」と返しますと、だいたい皆黙り込みます(会場笑い)。私は私自身を含めて「気の弱い男ならいくらでも紹介しますよ」と言えるのですが……。

翌日、A.M.D.A.からもう一人フィリピンへ送り込む必要ができ、本部の女性を派遣しました。外国へ入国する際は、最低六カ月のパスポート残存有効期間が必要になりますが、空港から電話をかけてきたその女性は「私のパスポートの有効期間は、あと四カ月しか残っていないが、とりあえず交渉してみる」と言っていたん電話を切ったのです。次に電話がかかってきたのは、夕方のマニラからです。という事は「フィリピンへ(入国に必要な条件を満たしていないにもかかわらず)入った」ということです。私はとても信じられませんでした。今までの経験からでは、女性はとても信じられ

求道会創立六十周年記念 男子壮年信徒大会 記念講演

『魂と医療—救える命があればどこへでも』①

A M D A 代表

菅波 茂

二月二十六日、求道会創立六十周年記念男子壮年信徒大会が開催され、『魂と医療—救える命があればどこへでも』の講題で、A M D A 代表の菅波茂氏が記念講演を行った。A M D A (特定非営利活動法人アムダ)は、スリランカやコンボで敵味方の分け隔てなく医療活動を行い、また、世界各地で発生する大地震や台風などの自然災害においても、早急に救援チームを派遣するなど、わが国を代表する国際的NGOとして国連からも高い評価を受けている。本誌では、数回に分けて、菅波茂氏の記念講演を紹介してゆく。



菅波 茂 先生

▼金光教国際平和活動センターとの連携で

実は、私がこちらの泉尾教会に来させていたただくのは二度目(註:二〇〇二

貴重な場を与えていただいたことに感謝申し上げますと共に、六十周年を迎えられたことに心よりお慶び申し上げます。来春には泉尾教会様も布教八十周年を迎えられますが、これにあたってのスローガンが『人を助けよ、燃えるいのちで』だと伺いました。私もA M D Aも『救える命があればどこへでも』というスローガンを担っております。「是非、これからも泉尾教会の皆様と一緒に活動させていただけたら」と思っています。

一口に「人助け」と申しましても、医者がやって良いこと

年一月、人類共栄会創設五十周年記念シンポジウムが開催された際に、基調講演者として来訪されたになります。本日は何よりも、求道会が創立六十周年記念の男子壮年信徒大会で

ないようなことをやってのけてしまっただけですね。今回、私は「女性がミッションの気持ち(使命)を持った時は、すごいことが起きるんだな」ということをつくづく感じました。

現地で一緒に活動して下さっているのは、フィリピンの人たちです。フィリピンでは、広い地域でタガログ語が話されていますが、レイテ島はまた違った言語が話されています。ですから、英語しか話せないわれわれ日本人だけでは、現地ですら世界でも通用しませんが、「医療」はサイエンスですから世界どこでも通用しますが、「医療」はそれとは異なり大切です。医療とはすなわち「医師と患者との関係」ですから、医療行為にはその国ごとの文化が入ってきます。文化で最も大切なのは「言葉」であり、言葉によって自分たちの気持ちを相手に伝えます。ですから、われわれの活動は、現地の方が関わって下さるか否かで大きな違いがあるのです。

▼魂と医療のプログラム

私たちAMDAは、宗教学の先生方をお願いして、われわれの医療活動と共に、第二次世界大戦における日本軍と連合国軍の戦死された軍人に限らず、現地で戦闘に巻き込まれて犠牲になったすべての方たちのために慰霊祭を行う『魂と医療のプログラム』を、二〇〇〇年から現在に至るまで続けています。この今回の活動におけるキーパーソンは、先ほど

「名前を呼び(存在を忘れていない)、挨拶をし(関心がある)、『ありがとう』と感謝を伝える(必要としている)」ことになり、これが「相手を認める」ということですが、これは死んだ人にも言えるのではないのでしょうか？ 人間は死んでしまった後も、人から忘れ去られることは寂しく、興味を持ってほしい。場合によっては、死んでしまった私を必要としてほしい。こんな発想から、私たちが『魂と医療のプログラム』を始めて今年で六年が経ちました。

何故、AMDAがこのようなプログラムに取り組むようになったかと申しますと、先ほどご紹介の中にもありましたように、AMDAはアジア・アフリカ・中南米の二十九カ国に支部があり、インドネシアやフィリピンにも支部があります。そこでは、第二次世界大戦中に日本軍との戦闘に巻き込まれて亡くなった方が大勢おられますが、それだけでなく、AMDA支部の名誉顧問であるプリミティボ・チュア先生をはじめとして、支部のメンバーの関係者も戦争に巻き込まれています。ですから、「慰霊」はAMDAが「平和」を謳う時に避けて通れない問題でもあり、また、これに対して、われわれは何か答えを出さないと、現地での活動がなかなか上手くいきません。

AMDAにおける「平和」の定義は、「今日の家族の生活(食へることができ、健康である)と、明日の家族の希望(子供に

お話ししたプリミティボ・チュア先生だったので、かつてこの人が私に言ってくれた言葉があります。チュア先生は、小学校一年生の時にマニラで日本軍と米軍との市街戦があり、いろいろ凄惨なことが目の前で起こるのを見た訳ですから、そのことを恨みに思っているかと思いましたが、「大勢の人が亡くなり、また、巻き込まれたのだから、慰霊祭を行ってはどうか？」と、逆に提案をいただきました。その時、イメージとして頭に浮かんだのは、沖繩の摩文仁の丘にある『平和の礎』でした。これには、沖繩戦で亡くなられたすべての人の名前が書いてあるのですが、これとまったく同じ思想を感じます。

これはつまり、私たちが「人権という言葉をどのように理解するか？」ということなんです。国会では『人権擁護法案』が流れています。何故、人権という人間にとって最も大切な法律が可決されずに流れているのか？ 私は、そもそも人権という定義がないことが一番の問題であり、「定義のないところに物事は成り立たない」ということが基本にあるように思います。

私たちAMDAは、人権を「存在を認めること」と定義づけています。存在を認めることは、すなわち「私はあなたの存在を忘れていない。あなたに関心があり、あなたを必要としている」ことですが、これをもっと簡単に言い換えますと

教育を与えられる)が成立する状況ですが、この平和が成り立つ状況を阻害するものとして、「戦争」と「災害」と「貧困」が挙げられます。私たちが「戦争」の中で「平和」を掲げることに対して、「じゃあ、六十年前の話(第二次世界大戦における日本の侵略はどうなるんだ?)と問われた時に、答えを出したい。そんな思いから『魂と医療のプログラム』に取り組んでいます。

私たち医師は、医療に関するプログラムを行うことはできませんが、死んだ人の魂をどのように弔ったら良いか？ ということに対しては、経験もなければ、そのための訓練も積んでいません。そのため、宗教学の方々と私たちAMDAが一緒に活動させてもらっています。一方で私は「こういった活動を通して、また新たな関わりが出てくれば……」と、期待もしております。

(次号へつづく 文責編集部)



『魂と医療—救える命があればどこへでも』②

A M D A 代表

菅波 茂

二月二十六日、求道会創立六十周年記念男子壮年信徒大会が開催され、『魂と医療—救える命があればどこへでも』の講題で、A M D A 代表の菅波茂氏が記念講演を行った。A M D A (特定非営利活動法人アムダ)は、スリランカやコンボで敵味方の分け隔てなく医療活動を行い、また、世界各地で発生する大地震や台風などの自然災害においても、早急に救援チームを派遣するなど、わが国を代表する国際的NGOとして国連からも高い評価を受けている。本誌では、数回に分けて、菅波茂氏の記念講演を紹介してゆく。



菅波 茂 先生

▼意欲と能力のある人に機会を与える

私たち(日本人医師団)がレイテ島に行きましたら、インドネシアのA M D A 支部からも医療チームを出してくれました。われわれは、とかく「人道援助は先進国の専売特許だ」と勘違いしがちですが、発展途上国の医師たちも、先進国の医師と同様にしつ

かりとした倫理と教育を身につけています。彼らは「自分たちにもチャンスがあれば助けに行きたいのだけれど、そのチャンスを与えられないから行けない(人道援助活動に関われない)のだ」と言います。ここで、私たちは「差別とは何か?」ということについて考える必要があります。

「意欲と能力があれば、機会が与えられて結果が出せる」とことがフェア(公正)だとすると、差別とはいったい何だと思われませんか? 私は、「意欲があつて能力があるにも関わらず、チャンスが与えられず自己実現ができない」ことだと考えて

います。これを先ほどのA M D A のアジアの支部の医師たちに準えようと、「意欲も能力もあるけれど、(被災地や紛争地域へ)行くための費用がない」あるいは「それだけのチャンスが与えられない」ために、今まで(彼らの希望が)表面に出ることがなかった訳です。

アンディ・フスニ・タンラ(Andi Husni Tanra)先生は、A M D A インドネシア支部の支部長ですが、この先生は、ハサヌディン大学医学部麻酔科の教授でもあります。以前、彼が私に「意欲と能力を持っているにもかかわらず、チャンスが与えられない」あるいは「意欲があつても能力を身につけるチャンスが与えられない」そういった歴史を私に語ってくれたことがあります。アンディ・フスニ・タンラ先生はスルタンです。インドネシアにおける「スルタン」とは、イスラム世界の政治的リーダー(註:日本における大名のような領主的存在)なんです。第二次世界大戦前まではイスラム教徒のグループを率いるリーダーでした。しかし、オランダがインドネシアを支配していた当時、医師になるチャンスを与えられたのはキリスト教徒の人々だけで、イスラム教徒の人々は医師になれなかったそうです。そして、インドネシア独立にともない、スカルノ氏が大統領になると、各地の領主であったスルタンの地位が没落してしまいました。そんな大変難しい状況の中で、彼は一生懸命勉強して、ス

ラウエシ(セレベス)島で初めての医師になったんです。現在、彼のようなイスラム教徒のインドネシア人が医師になる資格を目指して頑張っているのですが、それでも、一万以上の島があるインドネシアで国民ひとりひとりに医療を保障するためにはまだまだ医師の数が足りません。そこで、奨学金を出し、各島の優秀な人を医師にするために医学部に行かせている訳です。奨学金を必要とする背景には、タンラ先生曰く、「インドネシア政府は離島の医学生生の学費は免除してくれるけれども、生活費の援助までは手が回らない」という実情があるからなのです。そして、「インドネシアでの生活にも、月に四、五万円の費用はかかる。けれども、この生活費が補助されないと、意欲と能力がある者でも医師になるためのチャンスが十分でないのだ」といったことを言われました。この問題提起を受け、私たちも様々なプログラムによって支援を続けています。

▼人を助けよ 燃えるいのちで

泉尾教会は布教八十周年を迎えるにあたり、『人を助けよ 燃えるいのちで』というスローガンを掲げられたそうです。私はこれは上の句だと思っんです。そうすると、どんな句でも下の句があるのではないか? ということで、私は「どのような下の句をつければ良いだろうか?」といういろ



菅波先生の熱弁に耳を傾ける求道会員たち

教会の『人を助けよ
燃えるいのちで』
というスローガンを聞いた時、それがふと脳裏に浮かびました。泉尾教会のスローガンの下、の句は、私はいいます。『人を助けよ 燃えるいのちで。されば、金光教泉尾教会の灯の絶えることなし』と……。このよう

に教育を与えるための学校、そして、人間は生きていけば必ずなりますが、病気になるための病院。この「ホテル、学校、病院を建てる仕事」を、この財団がされています。「楯音を絶やしてはいけない」というのは、この仕事を通して利益が上がれば、それをまた新たな建設費用として民衆に還元しろということです。その建設の音が途絶えた時にビルラ家は滅ぶ……。そんな家訓があるんです。

それを聞いた時に私は本当に感動したのですが、この泉尾

考えてみました。皆様の中に良い下の句を思いつく方はおられますか？ 私は、きつとあると思ひまして、まず下の句を考へる前に、どうして泉尾教会が『人を助けよ』という文句をまず頭に持って来られたのか？ そして、『燃えるいのちで』と続きますが、いったいどうやったらいのちが燃やせるのか？ などということを非常に興味深くいろいろ考えさせてもらいました。

そこで思いついたのはやはり、『どんな人間でもどんな組織でも、必ず原体験というものを持つている』ということですが。前回、泉尾教会へ伺った時に、いろいろとこの教会の話をお聞かせいただいたのですが、その中でも私がピンと来たのは、この泉尾教会の初代教会長である三宅歳雄先生が、当時の教会堂を建設されている途中で、(ジーン台風の高潮による)水害に見舞われた時の話です。その時、泉尾教会は建設途中であったにもかかわらず、付近一帯の人々を被災者として受け入れたことが二度ほどあったと聞きました。私は、この「自然災害による被災者を受け入れた」という原体験が、いろいろな形で出てきているのではないかと、思うので

もし、私がこの「泉尾教会の初代の三宅歳雄先生が、教会を建てている途中であっても多くの人々を受け入れた」という事実、歴史を知らなかったら、『どうして『人を助けよ』

という言葉が出てくるのか？」という疑問が浮かんだかも知れません。けれど、幸いにも、私はそういった泉尾教会の歴史を以前に伺っていましたので、すぐに理解できたんです。

下の句といえは、以前に私が聞いた、インドのある大きな団体の歴史を思い出します。現在、「中国の次に世界に台頭してくるのはインドだ」と言われていますけれども、インドにはタタ財団やビルラ財団といった非常に大きな財団があり、インド社会を動かしています。このうちのひとつ、ビルラ財団を十年ぐらい前にNHKが紹介していたのですが、この番組を見た時に私は非常に感動しました。

どんな組織も、初代の人が創設した後、二代、三代、四代、五代と続いていくためには、その集団が団結力を持ち続けるため、求心力を生み出すための一句というものが必ずあると私は確信しております。このビルラ財団というのは、もともとインド北西部にある砂漠からニューデリーに出てきたヒンズー教徒の一部族なんですけれども、今日のインド社会では圧倒的な影響力を持つている団体です。実は、この団体はひとつの家訓を持っています。家訓は、必ず一族すべての者が守らなければならないものですが、それは「建設の楯音が途絶える時、わがファミリーは滅ぶ」という一句なんです。何の建設の楯音かと言いますと、このビルラ財団は、全国のヒンズー教徒が聖地にお参りに来た時に泊まるホテルや、子供

な言葉が、スツと出てきました。それからもうひとつ、先ほど私は「差別とは、意欲と能力のある人間にチャンスを与えられないことだ」と申し上げましたが、これは裏返せば「人を助けよ」とはいったいどういうことなのか？ という問いになります。私はその答えとして「意欲と能力のある人にはチャンスを与えていけ」と。このように理解しても間違いではないんじゃないかと思ひます。

▼AMDAの原点

私はAMDAを創り、発展途上国に支部を作るためのアプローチを行ってきましたが、その際『人道援助の三原則』というものを定義しています。この三原則のメッセージを聞いた発展途上国の医師たちが「それだったら私たちもAMDAの医師たちと一緒に活動したい」と共鳴し、支部を広げる原動力となってくれました。この三原則とは、第一に「誰でも他人の役に立ちたいという気持ちがある」。二つ目が「この気持ちの前には宗教・民族・文化の壁はない」。三つ目が「この気持を受け取る側にもプライドがある」。このプライドとは、すなわち「自分も社会から必要とされたい。自分も社会から認められたい」という思いがある」ということですが、この三つ目の「援助を受ける側にもプライドがある」というメッセージに、発展途上国の医師たちが非常に共鳴しまして、「自分たち

だつて医師として立派な意欲を持っているし、能力も磨いている。それなのにチャンスがもたらえない。けれども、AMDAに入れば『援助を受ける側にもプライドがある』という私たちの気持ちを解ってもらえた上で活動ができる。それならば、自分たちもAMDAの支部を作つて一緒に活動したい」と……。そして現在、二十九カ国までAMDAの支部が広がり、実際、今回のレイテ島のような災害が起こつた際、隣国からAMDAのメンバーが出かけていくところまで育つてきています。

この「意欲と能力があればチャンスが与えられる」という信念は、私がAMDAを作る原点でもありましたし、私自身の発火点でもあります。これは「教会の建設途中であつたにもかかわらず、災害に見舞われた多くの付近の人々を受け入れた」という泉尾教会の原点と繋がるのではないかと、思います。

昭和四十四年（一九六九年）当時、各地の大学は学園紛争によつて閉鎖されていきました。私が通つていた岡山大学でもストライキが行われていましたが、その時に、私はアジア各国を回つてクウェートの辺りまで四カ月かけて行きました。そして、帰国後の昭和四十五年、「アジアに医療チームを出したい」と思い、様々な運動をしました。当時、アジアの大学に行くためには、（自分が在籍する）岡山大学の推薦状がないと

受け入れてもらえなかつたため、岡山大学の医学部の教授会に「医療チームを出したいので、ぜひ許可の判子を捺して欲しい」と頼みました。しかし、当時の医学部の先生方は、（学園紛争で）学生たちから散々酷い目に遭わされていますから、「学生を信用することはできない。学生がやっている運動には判子は捺せない」と一蹴されたのです。

私は困つて、学長代行——当時の学長は学生紛争で失脚したため、谷口澄夫という文学部の教授が代行に選ばれていました——に電話を入れて「一度会つて話を聞いてもらいたい」と頼みましたら、「じゃあ、今晚私の家に来い」と言われました。その晩、私は谷口先生のお宅に伺い、私の思いやアジアで実際見てきたこと、そして医療チームを出したいという気持ちを伝えましたら、先生は「よく解つた。今、菅波君の言っていることは将来の岡山にとつて必要なことだから、たとえ教授会が許可しなくても、私個人で判子を捺してあげよう」と言つて下さいました。私が礼を述べて帰る間に、谷口先生は「菅波君、何故私が君に会うつもりになつたか判るかね？」と問われました。「いいえ、判りません」と答えると、先生は「紛争中の学長代行をやっているから、実にいろいろな人から電話が山のかかってくるが、まず自分の所属先と名前を名乗つたのは君が初めてだつた。だから君と会う気持ちになつたのだ」と答えられました。それからというも

の、谷口先生は蔭になり日向ひなたになりAMDAを見守つて下さいました。

去年、AMDAは岡山大学と協定を結びました。現在、大学は国立大学といえども独立行政法人になりましたから、お上に頼ることなく自ら生きて（財源を確保して）いかなければなりません。私は、AMDAが持つている国際的ネットワーク、経験、人脈というものが、岡山大学が生きていく上で大いに役立ててもらえたら……。そう考える時、三十五年目に初めて谷口澄夫先生の判子が生きてきたように思うのです。もし、谷口先生が判子を捺して下さらなかつたら、今頃こうやつて皆さんとお目にかかることもなかつたかも知れません。（次号へつづく 文責編集部）

五月四日（休）午後七時より

五日（祝）正午まで

御布教八十年記念大祭迎え

第三回 信 徳 殿 開催

入殿を通して、二代親先生亡き後の信心の
自己吟味をさせていただくために、ひとり
でも多く入殿させていただきます。

五月十三日（土）午後二時

親先生五十日合祀祭執行

先代恩師親先生の跡を継がれ、人助けの御
用ひとすじに歩まれた二代親先生にあら
ためて御礼申し上げ、御布教八十年記念大
祭に向けて全信徒一丸となつたお道引き
を誓わせていただきます。

五月八日（月）午後二時

親先生四十日祭執行

五月十四日（日）午前六時二十分

母に感謝の集い開催